
新東方体験日記

夢の島

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新東方体験日記

【Nコード】

N4795Z

【作者名】

夢の島

【あらすじ】

夢の言葉通りに現実でその場所に行ったらいきなり幻想郷。そんな世界を知らない主人公（海竜勝）は此れから幻想郷で様々な体験をする。「彼が見る夢は現実に起きる」そんなお話しで彼の物語はスタートする。東方二次創作小説「新東方体験日記」幻想郷を舞台にした海竜勝の体験話です。

第1話〜夢の巫女と幻想郷〜（前書き）

どうもはじめまして夢の島と言います。前作の東方体験日記を見てくれた人達お気に入り登録をしてくれた人達に小説消去と言う大変失礼な事をしてしまいました。本当にすみません。このお話は新东方体験日記です。前作を見てくれた人達はお気づきになると思いますがお話しが変わってます。このお話しは二次創作です。物語が外れ過ぎて「こんなの幻想郷じゃない！」と言う方が出てくると思います。作者の自分が初心者な為に分かりされる事があるとおもいます。それでは「新东方体験日記」をお楽しみ下さい。どうぞ。

第1話　夢の巫女と幻想郷

年末の近い雪が降るとある街。周りは夜の雪景色。車の行き来がたまにある小さな道の住宅地の1つの一軒家の物置で1人の少年は何かを探している。

「年明けの準備をするとは父さんは言ったけどまだ年明けまで大分あるじゃないか。」

少年の名前は海竜勝。かいりゅうしょうごく一般の普通な高校生だ。身長は180センチはありスポーツをしてる体格をしてる。

「勝！早く年明けに使う物を部屋に持ってきてくれ。」

物置の外、庭の方で父さんの声がする。

俺は物置を出た。

「父さん物置の何処にしまったのさ？探しても無いよ。」

無いと言う物は海竜家を使う置物だ。父さんが作った物で毎年の年明けに部屋に置かれる。俺も何故父さんがその置物を作ったのか内容は聞いた事が無い。

「無い？そんな筈は無い。確かにこの物置にいったぞ。」

父さんは物置を探り始めた。

「貴方もう止めたらどうですか。」

母さんが来た。

流石に母さんが言うのも無理が無い、かれこれ3時間は物置を探っていたのだから。

俺も眠気がさしてきた。

「父さん俺はもう寝るよ。」

「すまないな勝。後は父さんが探すからお前は本当に寝ると良いよ。」

「おやすみ。」

裏口から自分の部屋に戻る。部屋に入り明かりを点けた。表彰状が至る所に貼られてる。布団に座った。

「明日は柔道の朝練だな。」

勝はごく一般とは言っても高校では柔道の名が広がってる。試合も優勝する腕を持つてる。

目覚まし時計を取りセットする。

「4時半に合わせて、これでよし。」

布団に入った。

俺は夢を見ている様だ。見たことの無い神社で俺はただ周りを見て

る。向こうの方から1人の女性が来た。

「又、来たのね。」

その女性は黒髪で髪に赤いリボンを結んだ赤白の巫女服を着た女性だ。歳も差ほど変わりないだろう。

「何だ夢か。」

俺は又いつもの女性が出てくる夢だと直ぐに認識し歩きだした。

「今日は貴方に良いことを伝えるわ。この夢の私の言葉通りに明日に貴方の所から近い神社に来ると良いわ。」

女性の姿は消える。周りの景色が遠くなった。俺は白い景色だけを見る。

そうして俺は夢が終わった気がした。

「ピピピ…」

目覚まし時計の音で俺は目を冷ました。4時間位の睡眠だったが良く寝た気がする。

「あの夢の女性、神社に来てって言ったな。」

制服に着替えながら俺は夢の女性の事を考えてる。

着替え終え柔道着を取り台所に行く。既に出来てる弁当を持った。

「弁当持ったし、よし行くか。」

玄関を出て。俺はまだ夜が明けないいつもの住宅地を歩いている。

「この辺の神社と言つと。」

夢の中の女性の言葉を信じてる訳では無いが少し興味がある。

「何度も出て来たからな行くだけ行くか。」

ルートを外れ神社のある方へ歩く。神社に行っても朝練までは大丈夫だ。

少し小さな神社の階段の前に俺はいる。昼間にお年寄りが寄る位の場所で俺もこうして来るのは珍しい。

石の階段を上る。鳥居のある所で階段は終わり俺は周りを見る。

「ユトー」

風の音だけが俺の耳に聞こえる。俺は周りを見ながら建物の方へ歩く。

「何にも無いじゃないか。」

当たり前と言えば当たり前なのだろう逆になんかが起きたらそれこそ驚き物だ。

俺は引き返した。

「俺もどうかしてたな夢の中の言葉を信用するなんて。」

本当に俺自身に呆れた。夢の中は夢の中であって現実には現実だ、こんな区別がつかない事が友達に知られたら大笑い者だ。

階段を下り終えた。

「さて朝練朝練。」

周りを見る。

「えっ！」

「何処だよ此所?..。」

俺は驚いたさっきの住宅地は無く辺り一面森が広がってるからだ。

「くそっ!どうなっちまったんだ俺の頭は!」

頭を叩く。力強く叩いたせいで少し痛い。再び周りを見るが何の変わりは無い。

俺は階段を駆け上った。

鳥居のある所に着いた。

「さっきの神社じゃない。」

建物もさっきの神社とは違う。良く見たら周りも雪が降っていた後が無い。

「この場面は夢の中の!？」

そんな筈は無いと信じたい。だが現実で俺は確かにその場所にいる。

「来たわね。」

俺の後ろで聞いた事のある声がある。まさか!と思い後ろを見た。

「夢の中の。」

信じられないと思った。いつも夢の中で出会った女性が現実で俺の前にいるのだから。

「いつも貴方の夢の中におじゃまさせて貰ってありがとうね。」

その女性は優しい笑顔を見せる。俺は不思議と冷静さを取り戻していた。

「俺もありがとう。」

何故、お礼を言ったのか俺も解らないただ今お礼を言わないといけない様な気がした。

「夢の通り来てくれるとは思わなかったわ。」

「来て早々に悪いが戻らせてくれ此れから大切な朝練が待っているんだ。」

「この世界の住人に成るのよ。貴方は。」

いきなり話が変わった。来てくれたお礼の次はこの世界の住人？頭の整理がつかない。

「冗談きついで。」

笑おうと思ったが笑えなかった。その前に他の事を教えてもらいたい。

「教えてもらいたい事があるまず貴方の名前とそしてこの世界と言うのを。」

「その前に貴方の名前は？」

「俺は海竜勝。」

「私は博麗霊夢。そしてこの世界は幻想郷。貴方の世界とは違う世界よ。」

その女性、博麗霊夢は言った。

第1話「夢の巫女と幻想郷」(後書き)

海竜勝は夢の女性(博麗霊夢)の言葉通りに現実で幻想郷入りとなる霊夢は何故に勝を誘ったのか。次回にご期待を。

第2話〜巫女の訳と能力〜

俺は博麗霊夢のその言葉を聞き考えた。

「幻想郷？聞いた事の無い名前だな。」

そんなに地理は詳しい訳では無いが本当に聞いた事が無い。

「それに俺の世界とは違うとは一体なんだ？」

考えてる俺を霊夢は見てる。

「驚いたでしょ。いきなり違う世界って言われて。」

「いや、むしろ驚くのを通り越して驚けないな。」

驚けない。いや、それ以前に今の状況を信じてない。

霊夢は階段の方へ歩きだした。

「何処に行くんだ。」

「良いから着いてきなさい。」

俺は着いて行く。

鳥居の前で霊夢は周りを指差す。

「この世界には妖怪や妖精や貴方の世界にはいない人達がいるのよ。」

「
妖怪や妖精？。確かに俺の世界にはいない。でも何で俺をこの幻想郷と言う世界に連れて来たかったのだろうか。」

「何で俺をこの世界に？」

霊夢は階段を下りてる。

「教えてくれ！」

霊夢は歩くのを止めて座った。階段の下の方を見る。

「体験してほしいのよ。貴方からして初めて見るこの幻想郷を。」

霊夢は落ち着いた表情で俺に言う。

「それが俺が此所にいる訳か？」

霊夢は立ち上がって俺の方を向いた。

「そう。だから貴方は体験しておいで。」

「トン」

誰かが俺を背後から押した。

「！！！！」

空間が割れたと言うのだろうか、俺はその割れた空間に落ちる。

俺は自分を押し出した者の姿を見る。白の赤色の細いヒモが中心に結ばれた帽子を被った金色に近い髪、白と紫色の服を着た女性だ。

「貴方の此れからの体験は私達が見続けるよ。」

その女性は俺に一言だけ言った。

俺は空間に落ちた。

空間が閉じた。

「紫、彼は大きく変わって又此所に戻って来るわ。」

「そうである事を願うよ。」

その女性、八雲紫は言った。

俺は暗い空間を落ちてる。下の方が光ってる。俺は空間を出た。

「ドン!!」

受け身を取り怪我は免れた。

俺は立ち上がった。

「何が体験しておいでだよ…。」

それにしてもさっきの背後から押されたのは本当に油断したまさか
霊夢の他にもう一人いたとは。

「又、違う場所だしよ。」

俺は周りを見る。色々な物が置いてある。そうして見ると1人の男性が俺の方に来た。

「凄い所から来たお客さんですね。」

俺は男性を見る。銀髪に近い髪の眼鏡をかけた落ち着いた感じの人だ。黒色に青色が入った服装でポーチを着けてる。

男性は俺を見る。

凄い所から？天井からと言っているのだろう。確かに天井からお客さんは降って来ないからな。天井から降る俺は珍しいお客さんなんだろう。

「すみません。いきなり凄い所から出てきてしまって。」

「八雲紫さんですね。」

「八雲紫？」

初めて聞く名前だ。

「名前を解らない処を見ると貴方はこの幻想郷の人では無いですね。」

「はい、違います。まず幻想郷と言つのが俺にも解らないのですよ。」

「来て下さい。」

俺は男性の後に着いて行く。テーブルと椅子がある。

「どうぞ座って下さい。」

椅子に座った。男性も向かいの椅子に座った。

「申し遅れました私はこの香霖堂の店主で森近霖之助です。」

「海竜勝です。」

香霖堂？それが今俺がいる場所か。

「海竜さん。霊夢さんや魔理沙さんには会いましたか？」

「霊夢と言う人には会いました。ただ、もう1人の魔理沙と言う人が解りません。」

「霊夢さんには会ったのですね。それではこの世界の事も聞きましたね。」

「俺の世界にはいない妖怪や妖精がいると言っただけ聞きました。」

「そうですか。」

霖之助さんはそう言うと考え始めた。

「霊夢さんは何か言っていましたか？」

「体験しておいで、とそれを俺に言いました。」

「それで紫さんに空間に落とされてこの場所に出たと言っことですね。」

「そうです。」

俺は霖之助さんに色々話していた。霊夢が俺の夢に何回も出てきた事や幻想郷に来る前の事もそして紫と言う人が俺に言った事も。

「海竜さん、霊夢さんの言う通り本当に体験してみてはどうですか。」

「体験ですか。」

「はい、そして霊夢さんの所に戻ってみると良いですよ。」

体験する事に納得はいった。だけど俺の世界は大丈夫なのだろうか。柔道も大学推薦の期待を持たれていてそれをすっばかす事になる、流石に行方不明者になって搜索願いが出てるのは困る。

「俺の世界で行方不明者になってないよな。」

霖之助さんは笑っている。

「大丈夫ですよ。霊夢さんもそれは考えてますよ。」

「そうですよね。」

俺はそこは考えない事にした。

体験する事を決めた勝ですがその頃、博麗霊夢のいる「博麗神社」では。

「きつと喜ぶわよ。」

霊夢は1人の女性と話している。紫ではない。

「それでこの事をその人は？」

「知らないわ。だけど彼は夢を見るわ。」

彼とは（海竜勝）の事を言ってる。

「夢を？」

「彼の能力「夢が現実に起きる程の能力」よ。」

「能力？だけどその人はこの世界の人では無いのでは？」

「なぜか持っているのよ。まあ、それが彼を連れて来た訳なんだけどね。」

「そう。」

「さて、貴方もそろそろ帰った方が良いわね。」

女性は帰った。

戻って海竜勝は。

俺は夜も遅いと言う事で霖之助さんに「明日に始めてみては」と言われて香霖堂に泊まっている。

俺は夢を見てる。

見た事の無い場所。周りは霧がかかっている。

「又々何処だよ此所は。」

俺は歩き出した。

だが夢はそこで終わった。

第2話〜巫女の訳と能力〜（後書き）

霊夢が言った海竜の能力。そして霊夢が話していた女性の正体とは。そして海竜は夢でどこにいたのか。次回にご期待を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4795z/>

新東方体験日記

2011年12月18日06時46分発行